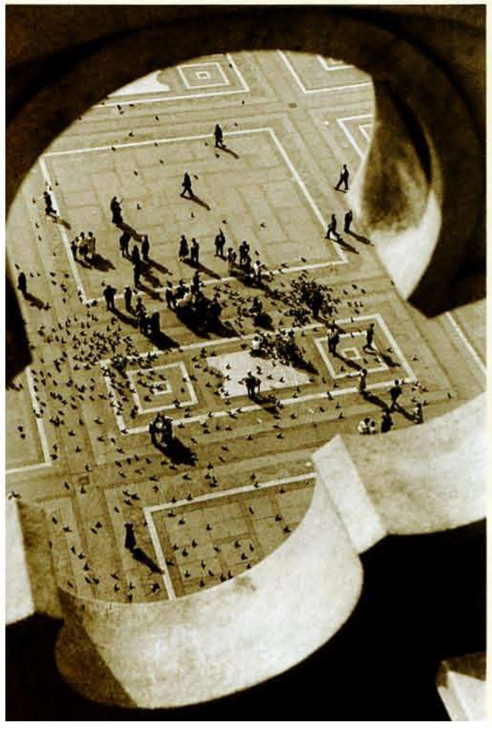
人・街・建築への視線

WATANABE Yoshio: A Photographer's View of People, Towns and Structures



■開館一周年記念展■

渡辺義雄の世界

1996年2月1日[木]—3月31日[日]

開館時間＝午前10時～午後6時／木・金曜日は午後8時まで
（入館は閉館の30分前まで）
休館日＝毎週月曜日（月曜日が祝日の場合は翌日）　会場＝3階常設展示室
観覧料＝一般・大学生500[400]円　小・中・高校生250[200]円
（映像展示室の観覧料を含む／[ ]内は20名以上の団体料金）
主催＝東京都写真美術館　協力＝東武鉄道(株)

東京都写真美術館

東京都写真美術館では本格開館一周年記念展として「渡辺義雄の世界」展を開催いたします。

渡辺義雄は1907(明治40)年に生まれ、昭和初期に日本における近代写真の原点ともいうべき数々の作品を発表し、その後の写真家達にも多大なる影響を与えた作家です。また昭和28、48年、平成5年の3回の遷宮に際し伊勢神宮を撮影した唯一の作家として、その名を知る人も多いことでしょう。今回の展覧会は、戦前から戦後にかけての仕事、世界に向けられた視線<モスクワ・イタリア>、そして代表作である建築写真の3つのパートから構成し、写真をとおして表現された渡辺義雄の視線や写真に対する考え方を約170点の作品群から探ろうとするものです。

戦前から戦中にかけてのネガや作品の大半は第二次世界大戦の戦火で消失してしまっています。しかし今回の展示では、当時の写真家達の活動の要であった写真雑誌の発表などをとおして作家の精力的かつ挑戦的な活動を再考します。『フォトタイムス』等を中心とした作家の仕事は、現在振り返ってみても斬新な感性にあふれています。また、終戦の直前直後の東京の様子を記録した写真も貴重な資料として展示します。

戦後、渡辺は1956(昭和31)年、世界平和協議会に日本・アジア連帯文化使節団写真家代表として参加します。その際に訪れたモスクワ、ヨーロッパ、アジア諸国の人々の暮らしを生き生きした視線で捉えています。特に、当時のモスクワやイタリアでは日本と異なった文化や人々の暮らし、街のすがたなどに触れ、印象的な作品を数多く残しています。

そして人々の生活を捉える鋭い洞察力は、建築写真という分野でよりいっそう発揮されます。渡辺義雄の建築写真は光と造形物がつくりだす一瞬を撮り逃さず、余計なものを一切排除した究極の表現として完成されます。真っ直ぐに取り組んだ作品は、観る者をその建築の目前に誘います。作家の建築にむかう視点、建築物の造形美、伝統美に対する考え方を「伊勢神宮」「古寺大観」「宮殿」「庭園」「帝国ホテル」の代表作から探求します。

現在、わたしたちの周りにはさまざまなメディアが氾濫し、写真という表現媒体の考え方が複雑に変容しています。このような状況のなかで、写真そのものに正面から向きあい、作品を創りつづけてきたひとりの作家の視線に触れることは、写真の機能、美意識、写真ならではの表現というものを再考するきっかけになることでしょう。

■講演会のお知らせ
「作家活動70年を振り返る」
日時／3月2日(土)　午後3時～5時
会場／東京都写真美術館　1階ホール（無料）
対談／渡辺義雄(写真家)・桑原甲子雄(写真家・評論家)
司会／三木多聞(東京都写真美術館長)

■フロアレクチャーのお知らせ
日時／それぞれ午後2時より
2月8日(木)
2月22日(木)
3月23日(木)

1、『新興写真研究』誌より「八ツ手」　1931 個人蔵
2、「徳田秋声」　1932 ヴィンテージプリント 作家蔵
3、「東京」　1945
4、モスクワの一日「左官屋」　1956 作家蔵
5、イタリア「サルデーニア」　1956 作家蔵
6、伊勢路「宇治橋からみる桜、内宮」　1973
7、伊勢神宮「内宮正殿の棟」　1953
8、古寺大観「東大寺　大湯屋の鉄湯船」
9、宮殿「正殿全景」　1969
10、帝国ホテル「前庭プールと主要入口，西側」　1967 作家蔵
表紙・上　伊勢神宮「内宮西宇殿のひさしの下から正殿を仰ぎ見る」　1953
表紙・下　イタリア「ミラノ」　1956 作家蔵

1

2

3

4

5

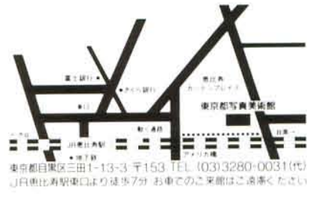
6

7

8

9

10



東京都写真美術館
展覧会のお問い合わせはハローダイヤルへ　03(3272)8600